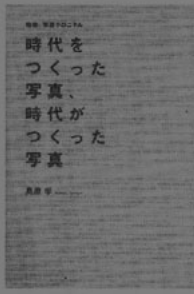
Book

ニュートラルな戦後日本写真史

『戦後、写真クロニクル〜時代をつくった写真、時代がつくった写真』

鳥原学著　日本写真企画　1800円



太平洋戦争後から現在までの世相と写真の関係を、クロニクル形式で俯瞰するという、ともすれば果てしなく壮大なテーマをコンパクトにまとめてあり、特定の史観や思想に偏らずニュートラルな立場をとっているので、国内の戦後写真史を扱った本としてはスタンダードな一冊となるだろう。

たとえば、戦後の写真報道のありかたに先鞭を付けた、『岩波写真文庫』などに代表される名取洋之助の仕事と、そこに関わった次世代のカメラマンたちが、その後のグラフ・ジャーナリズムに深く拡散・浸透していく様子。70年代ぐらいまで戦争の記憶と政治の季節を感じさせる表現が多い中、篠山紀信の〝激写〟などに象徴されるグラビア写真の需要拡大。80年代以降、カメラのコンパクト化も手伝い自己表現のための写真。その延長として、90年代以降はガーリー・フォトとアラーキーの影響力。また、それまで印刷媒体がほとんど唯一の発表の手段だったのだが、近年、オリジナル・プリントが商品価値を持ちはじめ、さらに、21世紀を迎えてのデジタル・データについての考察などまで、幅広い。

文字通り饒舌なカメラマンも少なくないが、本来的には写真表現自体が時代や世相に対する批評行為でもあるわけだから、撮影を伴わず文章のみで写真を語ることの難しさは想像に難くない。各章を5年ごとに区切り、章末にそれぞれの時代の深部を目撃してきた人物のインタビューが挿入されることで、歴史のダイナミズムに陰影を加えている。巻末の人名録も充実しているが、惜しむらくは逆引きが出来ると資料としての使い勝手はいっそうよくなっただろう。文中で取り上げている図版の引用も少ないため、実際の写真集や資料をあたる必要があるから、初心者にはハードルが高く感じられるかもしれないが、最低限の基礎学力として押さえておきたいところだ。荒川典久

『情報誌の中のロシア〜文化と娯楽の空間』岩本和久著　東洋書店　630円

モスクワやペテルブルクの文化状況を、00年創刊の『アフィーシャ』という情報誌の記事などを軸にして、書店やライヴハウス、映画館などがどのようになっているかを描き出す小冊子。ロシア文学が専門という著者は00〜01年にモスクワに滞在し、同誌を今も定期購読しているという。分量は少ないが、ロック事情に触れたり、クラブ・ミュージックへの言及もある。旅行ガイド風になってしまっているところもあるが、国際ニュースなどでは伝わらない生活感が漂う。

『歌の国スウェーデン〜クラシック音楽ガイド』戸羽晟著　新評論　3990円

スウェーデンのクラシック音楽に魅入られた著者による、同国の19〜20世紀の作曲家ガイド。国民性などの概観、各種情報やCDの入手方法などにも触れた後、スウェーデンの作曲家の特徴として〝歌〟あるいは〝旋律〟を挙げ、民謡からの影響も意識しながら解説していく。

新刊ひとくちメモ

『トム・ウェイツ〜素面の、酔いどれ天使』パトリック・ハンフリーズ著　金原瑞人訳　東邦出版　2730円

『酔いどれ天使の唄』の著者による2冊目のトム・ウェイツ伝。著者はポール・サイモンやニック・ドレイクらの評伝も手がけている。情報量は増しているが周辺取材などはなく、事実を追った伝記というよりは、著者が描きだすウェイツ像に共感できるかどうかが鍵となるエッセイに近い。巻頭40ページにウェイツのモノクロ写真が並ぶ。

『ポスト・ブックレビューの時代〜倉本四郎書評集（上）1976-1985』倉本四郎著　渡邉裕之編　右文書院　2940円

『週刊ポスト』の書評の選集。評文の中に、唐突にインタヴューが説明なく割り込んでくるし、その相手も著者とは限らない（レオ・レオーニ『平行植物』の回ではタモリが登場）という独自のスタイルを取っていて、初読時には構造がつかめなかったが、対話と評文が双方向から対象となる本を揉みほぐしていく。取り上げた本の一覧を巻末に掲載。